

精神的な傷つき（トラウマ）からの回復に関する臨床心理学的研究

－ 危険運転致死傷の遺族におけるPTG (Posttraumatic Growth) の在りよう－

廣瀬 沙和

問題・目的

1. 交通事故遺族を取り巻く現状

近年,我が国においては,犯罪被害者等基本法の制定等,被害者の権利が社会的に確立されてきている。そのような背景の中,悪質な自動車の運転にて家族を失った遺族を中心とした法改正運動が行われた。その結果,悪質な運転にて人を死傷させた際に適用される刑事罰,危険運転致死傷罪(刑法第208条の2)が平成13年に規定されることとなった。これによって,従来は業務上過失致死として処理されてきた飲酒等による悪質・重大な死傷事犯が,危険運転致死傷罪として立件可能となった。危険運転致死傷罪が適応された場合,故意・過失である傷害・傷害致死に準じた犯罪として処罰されることとなった。

2. 犯罪・事故の被害によるトラウマと感情表出

村尾・高田(2004)は,トラウマ体験は恐怖,怒り,自責感情の低下等をもたらすと述べている。特に怒りについては,犯罪・事故等の被害に遭った被害者およびその家族・遺族が抱く感情として多くの研究で報告されている。佐藤・小西(1999)は,遺族においてもっとも特徴的な症状は「抑うつ」と「怒り」であると述べており,エレン・ローラ(1994)は,性暴力からの回復過程で怒りを前向きに表現することが癒しに繋がると述べている。また,福井・松村(2003)は,犯罪被害によって心的外傷後ストレス障害(PTSD)に罹患した犯罪被害者の思いを分析した結果,回復群に特徴的な思いとして「加害者への怒り」があることを報告している。これらの先行研究から,犯罪の被害者およびその遺族において,「怒り」の表出は単なるネガティブな感情表出という側面だけに留まらず,精神的健康への回復過程として重要な意味を持つと考えられる。

3. PTG(Posttraumatic Growth) とは

一方で,ストレスフルな出来事を体験した後に,出来事以前よりも精神的な成長を遂げる例も少な

くない。そのような例は心的外傷後成長(PTG:Posttraumatic Growth, 以下PTGと略記)といわれる。PTGとは,「危機的な出来事や困難な経験における精神的なもがき・闘いの結果生じるポジティブな心理的変容の体験のこと」と定義されている(Tedeschi,R.G.,&Calhoun,L.G.,1996)。つまり,非常にストレスフルな体験の後に,その体験前より精神的な健康度が上がるという概念である。ここでいうストレスフルな体験としては,虐待,死別,事故,犯罪被害などのトラウマ体験が挙げられる。

本研究はその中でも,今まで焦点が当ててこられなかった危険運転致死傷の被害者遺族を対象とする。事故被害から年数を経て,遺族が被害前後でどのような生き方および気持ちの変化を感じているか,また,心理的成長がどのような在りようであるかをPTGの観点から検討し,臨床心理的知見を得ることを目的とした。

方法

<予備調査>

本研究における質問紙およびインタビュー調査への回答は,特にトラウマティックな出来事についての想起をするものであり,フラッシュバック等の精神的変調をきたすおそれがある。そのため,十分な配慮をもって研究協力者にあたる必要があり,予備調査を行った。

調査時期 2015年8月

研究協力者 本学の院生3名に協力を依頼した。

研究手続き 一人の予備調査が終わるごとに,面接時の映像を見ながら逐語録の作成を行った。そして,その逐語録と映像をもとに,トラウマに関する臨床歴20年以上の臨床心理士や指導教員からインタビューのありようや打ち振る舞いについての助言を受け,本調査に向けての参考とした。

<本調査>

調査時期 2015年9月下旬

研究協力者 危険運転致死傷の被害者の遺族1

名（飲酒運転による死亡事故。当時は法整備が整っておらず、加害者は交通事故犯として扱われた。）。

研究手続き 研究の概要を本調査の研究協力者に説明し、同意を得られたところで先述の予備調査を行った。その後、本調査の研究協力者と日程調整を行った。また、不測の心理的変動に対処するため、トラウマに関する臨床歴20年以上の臨床心理士が同席することについても同意を得た。本調査当日に、「研究協力者のお願い」「誓約書」を渡し、さらに個人情報保護の遵守や録音等の内容について説明・確認を行った。本調査の研究協力者から、調査への同意が再び得られた後、予備調査と同様に、質問紙、インタビューという流れで調査を行った。

質問紙 PTGの値を客観視するために「PTGI-J（日本語版外傷後成長尺度）」、現在の状態を把握する為に「IES-R（日本語版出来事インパクト尺度改訂版）」を実施した。なお、研究協力者のIES-Rの得点は20点であり、現在、PTSDにはあたらないと判断された。

インタビュー 「犯罪の被害に遭われる前、遭われた時、遭われた後で、あなたの生き方にどのように変化が生じたか、ということについて、自由にお話し下さい。」という教示内容のもと行った。その後、質問紙のPTGI-J（日本語版外傷後成長尺度）の全項目について「どうしてこの値に丸をつけられたのか、ご自由にお話し下さい。」という教示のもと、インタビューを再び実施した。所要時間は2時間程度であった。

分析方法 ジョルジ（2007,2013）の現象学的アプローチによる分析を行った。

結果

研究協力者の語りから、意味単位は計32個抽出された。意味単位をカテゴリー分けしたところ、被害以前から現在に至るまで主に、＜他人事という気持ち＞＜揺れ動き、混乱する気持ち＞＜いたたまれなさ（哀しみ）＞＜怒り＞＜自責の念＞＜時の流れ、人との共感によって得られる癒し＞＜両親を失った苦しみ乗り越えた甥への感服の気持ち＞＜加害者に被害者への気持ちの理解、人としての誠意を切望する気持ち＞という流れで、大テーマが見出された。被害直後から現在に至るまで変わらない想いとして、＜未だに癒されない

心の傷＞という大テーマも見出された。加えて、PTGに関連する想いとして見出されたのは、＜新たな可能性＞＜人間としての強さ＞＜他者との関係＞であった。また、PTGI-Jの値は105点中88点とかなりの高得点であり、本研究協力者においては、PTGが見られるという結論に至った。

考察

先行研究と同じく、本研究の研究協力者は、加害者への怒りを挙げており、なおかつPTGも生じているという結果であった。この結果から、このように加害者に対して正しく怒りを持つことは、被害者やその遺族の精神的な回復を促し、その結果PTGを促進する可能性があると考えられた。

また、＜怒り＞に関する意味単位を概観すると、遺族の気持ちを加害者に理解されない、共感されないという点が、研究協力者にとって最も怒れる点であったと考えられた。そのように考えたとき、本研究協力者が加害者を同じような目に遭わせたいと述べたのは、復讐としての文脈よりも、被害者や被害者遺族と同じ気持ちを味わってほしい、分かち合いたいという切なる想いがあったのではと推察される。

加えて、加害者が被害者の心の痛みを理解し、共有し、人としての誠意をもって被害者に関わるというテーマが、研究協力者から繰り返し語られていた。この結果から、加害者が被害者の心の痛みを理解し、共有し、人としての誠意をもって被害者に関わることが、本研究協力者の一番の願いであることがうかがわれた。

また、PTGの観点では、心の傷つきが完全に癒えることはないものの、その傷つきを抱きながらよりよく生きようとする結果、PTGはもたらされるということが本研究協力者の語りから示唆された。この文脈から、被害体験は心に大きな傷つきを残す一方、そこからの選択、行動次第で、その傷つきが、よりよく生きる為の糧になる可能性があると考えられた。

これらの結果から、犯罪被害者の周囲の人々、および加害者の周囲の人々が、犯罪被害者および遺族の怒りや傷つき、気持ちを正しく理解し、共感することこそが、被害者および被害者遺族の心の傷つきを癒すことに繋がると推察された。